２０１９年度　第８回講演会　記録

日　　時	２０１９年7月２７日（土）　１３：００～１６：００
会　　場	此花会館　梅香殿
講　　師	親子をつなぐ学びのスペース「リレイト」代表　中桐 万里子 先生
演　　題	二宮金次郎に学ぶ生き方
備　　考	参加者数　１７１名　　記録　西尾光市

はじめに

【田中 克 先生】

本日中桐先生をここへお呼びした背景は、2010 年 10 月に小田原で第 3 回ローカルサミットに遡ります。小田原は二宮尊徳生誕の地であり、サミットの基本理念は「報徳」におかれていました。この時は、もちろん、中桐さんの存在は全く知りませんでした。その後京阪奈学研都市にある国際高等研究所（尾池和夫先生が所長のときにお世話になりました）も関わり、これまでの石炭や石油などの地下資源に依存し続けてきた文明に代わるもう一つの新たな文明を模索しようとする試み」のため 2015 年にＫＧＩフォーラム（注）が立ち上がりました。この趣旨を拡げるため 2016 年、2017 年に連続的なシンポジウムが行われ、その成果をまとめた「日本の未来」という本が発刊されました。フォーラムの 3 周年とその本の発刊を記念したシンポジウムが 2018 年 2 月に開催されました。この時に中桐先生が「七代目が語る二宮金次郎、心田（道徳）と田畑（経済）の融合社会」を講演され、大変感銘を受けました。文化資本論の池上先生が京都で開かれている研究会においても農業者二宮尊徳の実像を話題提供されているとお聞きし、ここでのご講演をお願いしました。先人の知恵を学び直し、本年度のテーマ「確かな未来の原点を探る」と面白い講座になると考えています。

（注）「ＫＧＩ」は京阪奈グリーンイノベーションの略称。

【中桐 万里子 先生】

二宮家と私のつながりは、金次郎（初代）－尊行(子)－尊親（孫）－徳（いさお・曽孫）－貞子（玄孫）－理子（来孫）－万里子（昆孫）と続き、私は 7 代目です。私は祖母（貞子）から金次郎のことを聞いて育ちました。尊行の妻は鉸（こう）といい、近江の生まれです。彼女は金次郎をとても尊敬し、金次郎が何を大切にし、何を言い何を食べ、どんな暮らしをしたかを細かく日記に書き止め、この内容を子や孫たちに伝えていきました。以降女性が金次郎の語り部になりました。今日は祖母から聞いた金次郎の生涯とその生き方を紹介します。

講演概要

金次郎は今の神奈川県小田原に生まれ、吉田松陰らと同じ時代、ペリーの来航もあった時代に生きた人です。35 歳のとき小田原藩の飛び地栃木へ移り、70 歳で生涯を終えました。金次郎は農民でしたが、当時の農業は大変で、少し前に起きた富士山の噴火による影響、冷夏など異常気象で国中が疲弊していました。そのような中で金次郎の仕事は被災地を復興し村や町をよみがえさせることでした。生涯で 600 以上の復興をしました。彼は復興には 2 つのものが必要で、一つは「心田（希望）」であり、人々が未来に希望と活力を持たない限り土地は蘇らないと考え、心田の復活＝人づくりに力を注いだのです。もう一つは経済です。

人は理想ややる気だけで生きることはできない。経済を再興し、物心両面が整うことが大切と説きました。

１．実践家、二宮金次郎（尊徳（たかのり）・1787-1856）の姿

（１）一歩を踏み出す足

薪を背負って本を読む少年像でおなじみの二宮金次郎。意外と知られていない彼の人生は、地味にコツコツ生きた優等生イメージとは大きく異なる明るく豪快なものでした。たとえば、彼はとかく「勤勉」の象徴のように捉えられがちですが、実際には 机上の空論を並べ立てる単なる学者や物知り顔の理屈屋を何よりも嫌っていました。生涯を通して大切にしたのは、「勤労」という実践。だからあの像もまた、手に持っている本以上に、背負っている薪や一歩を踏み出している足が大切だと伝えられてきました。彼が生きた時代から 200 年以上が経過していますが、それでもなお、そこには、自分も相手も豊かに生きるための極意、自然との豊かな向き合い方、後輩や子どもた ちの育成などづくりへのヒント、物心両面で幸せになる秘訣、出遭ってしまう敵や困難や壁を生産的にこえゆくための極意など、現代にも活かせる知恵がたくさん宿っていることを発見できると思います。

（２）すべてを「活かす」（農耕型行動哲学）

水車と川の関係に注目すると、二つはまったく違うがコラボして価値を生んでいます。自分を水車、世の中のあらゆる相手を川と思う。まずは飛び込んで相手を知ったうえで自分らしく動く。金次郎は 70 歳の生涯を閉じるまで、生涯現役でした。少年時代の金次郎の銅像は柴を担ぎながら本を読んでいますが、成人の銅像は書物を手にしていません。右手に観察したことを書き留めるための筆を持ち、左手にノートを持っています。暮らしのあらゆることを書きまくるためです。書くことで季節等にも敏感になり気づきを産み出し、知恵や対策を考案するための方法にもなるのです。

われわれは、日常目にする十円玉や雀でも、いざ書いてみろといわれたらなかなかできないものです。書くことで相手の求める事が発見できることもあります。自分の仕事に誇りを持てない石切り職人も、自らが切り出した石が、教会の大切な建材として使われることを知るに至り、生きがいを持てるようになり得るという例えもあります。金次郎の座右の銘の一つは「生きているだけで丸もうけ」。何も持たないで生まれた人間にとって、与えられるすべてのものがいわば「もうけ」だと言う考え方です。

２．実践を押し出すパワー・エネルギー

（１）知る、よく見る、覚悟を決める

徹底した実践主義を貫いた金次郎は、その人生の多くを、自然災害による被災地の復興に注ぎました。亡くなるまでには、実に６００以上の村々の再建にかかわることになりました。度重なる自然の猛威を引き金に、政治や経済も動乱期へと突入し、人心も荒れた江戸時代末期、そんななかで心田（希望）と田畑（経済）の実りを再生へと導くことが、彼の仕事だったのです。その際、金次郎は一貫して、「ともに豊かに」ということにこだわっています。自分と相手、道徳と経済（心とモノ）、現在と未来。どちらかが犠牲になるような、奪い合い競い合いのやり方をこえる方法や、豊かな土地と貧しい土地という格差を生まず、どの土地もがそれぞれのやり方で幸せになれる方法、さらには、敵を生み出すことなく、さまざまな事態が共存共栄する方法、そうしたやり方で、ひとびとを導きました。

（２）工夫する、対策する、形にする

金次郎についての有名なエピソード、ある年田植えが終わったとき、今食べたナスの味が秋ナスの味がしたことから冷夏になることを予測し、村人を説得して植えた苗を引き抜いて植え替えさせました。金次郎にはリーダーの権限が与えられており、協力者には年貢を免除するという条件で説得したのです。こうして「天保の大飢饉」へ突入しますが、金次郎の指導を得た村からは餓死者は出ていません。冷夏がつづくなかでも、寒さに強い稗や粟への植え替えをし、すくわれたのです。金次郎は、常に目を開けて現

実を直視せよと説き、そのうえで、知恵や工夫による対策を生み出そうと呼びかけました。

（３）秘訣は「積小為大」

山仕事のプロからの教え、条件の悪い場所で他に比べて遅い成長の木は、上に伸びられないとき、目立たない根っこを下に伸ばすことがあり、それが台風・大雨・土砂崩れなどの危機に対応できる力にもなるそうです。樹齢 300 年～400 年の大木には、そのような過去を持つこともあると言います。

狩猟型(欧米型)の発想は、奪うことばかり考える弱肉強食、農耕型(日本型)は協働・共生の考え方。万物にはそれにふさわしい役割があり、大切なのは「一番を目指す」のではなく「一流に生かす」ことです。そのためには、小さな事へ気づきが大切であり、「慣れに注意する」ことが重要になります。夏のナスと秋のナスの違いは種の多さから判別できる、いわば誰もができるはずの気づきです。小さな、他愛のない程度の違いに敏感に気づき、それを生かそうと動き出し、村が飢餓から救われたとも言えるのです。

３．実践が生み出す「実り」

（１）実践モデルとしての「報徳」

報徳はスポーツ校をイメージしやすいですが、この考えは、豊田佐吉・渋沢栄一・松下幸之助・本田宗一郎などの経営者の経営哲学にも大きな影響を及ぼしています。数年前のＨＯＮＤＡのＣＭ「現実はなかなか思ったようにはならない。けれど、それがどうした。スタートはそこから。何度でもやればいい。昨日までの自分を超えよう！」は、目の前の現実から逃げずに挑戦を続けた金次郎哲学を彷彿とさせます。

暮らしの中の実践で言えば、①怒りの「なんで」: 世間を批判し動くことをあきらめた姿　②現状に飛び込む観察の「なんで」: 現状を少しでも良くしたいと現実に向き合う姿。とも言えます。失敗にも、その経験が成長の糧だと向き合うことが意義深いのかもしれません。成功は成長をもたらさないからです。

（２）心田の実り　から　田畑の実り　へ

金次郎も多くの失敗を経験していますが、その失敗を生かそうとしてきました。好きになる必要は無く、向き合うこと飛び込んでいく事こそ大切。小さなことに思いをはせて声に出す。ダメ出しではない
その姿勢が、相手のやる気を引き出すのです。

人間の脳には、主語は私しかないと言います。相手へのダメ出しは自分に跳ね返ってくるので、相手が出来ているときに声を出す。褒める必要はなく、あたりまえに慣れてなきものにしないよう気をつけ、相手の心に火をつけるのです。ある小学校の校長は、お掃除をさぼる子どもを叱るのではなく、地道にやっている子どもの写真を掲示することで、子ども達のやる気に火をつけました。

「宝」の語源は「田から」です。田畑は自然が作り出すものではありません。自然は雑草も育てるし、破壊も行うからです。農作業は、人と人との絆を高めもします。ひとは様々な可能性を秘めたひと粒の種のようなものです。土との絆をもち、養分を吸収して成熟した後は万倍の種子を産み出すのです。

４．豊かな未来へ

（１）give でこそ得る誇りや感動

金次郎の言うことは理解できるが、日常の忙しさにかまけて実行は出来ないという悩みを相談に来た人がいました。その家を訪問した金次郎は納屋の汚さに驚き「掃除をしろ」の一言を発しました。整理整頓を怠ると、時間・お金・空間の無駄遣いや、鍬や鎌のメンテナンスができない効率の無駄遣いも生じ、結果として生産性を落とすと考えたからです。掃除は心の眼を養うためのトレーニングにもなり得ます。すべてのものは、先人達が困難を乗り越えつつ達成してきた成果です。

（２）幸せの増産・生産

徹底した実践主義を貫いた金次郎は、その人生の多くを、自然災害による被災地の復興に注ぎました。亡くなるまでには、実に600以上の村々の再建にかかわることになります。自然による猛威を引き金に、政治や経済も動乱期へと突入し、人心も荒れた江戸時代末期。そのなかで心田（希望）と田畑（経済）の実りを再生へと導くことが、彼の仕事でした。その際、一貫して「ともに豊かに」ということにこだわりました。自分と相手、道徳と経済（心とモノ）、現在と未来。どちらかが犠牲になるような、奪い合いや競い合いのやり方をこえる方法。豊かな土地と貧しい土地という格差を生まず、どの土地もがそれぞれのやり方で幸せになれる方法。敵を生み出すことなく、さまざまな事態が共存共栄する方法。そうした方法で、ひとびとを導いたのです。

（３）未来へのループ（恩送り）

とかく、現代人は不足に目がいきがちですが、金次郎はそうは考えません。減点法の思考は何も産み出さない。加点法の思考が、宝を見出すと捉えたのです。例えば今、この会場の中心に大木がある様を想像して下さい。人それぞれに見方は異なりますが、その木が膨大な時間をかけてたどってきた過去に思いをはせることが出来たでしょうか。そこに宿る現実的プロセスを知り、「時間」を想うこと。それが心眼を駆使して現実を直視する「よく見る」ことだと金次郎は言います。そうして周囲を見れば、「懸命に生きているのは自分だけではない」という事実にも気づきます。そうすることで、もう一歩頑張れる。

あらゆるものには徳が備わっています。徳は長所と同義語ではありません。よく切れる刃物は凶器にもなるということです。重要なことは、良い悪いや長所短所ではなく、存在しているという事実です。あらゆるものは、壁に出会ってもあきらめず一歩を踏み出してきたからこそ、今そこに存在するのです。

【Ｑ＆Ａ】

Q1：田植えの頃食べたナスが秋ナスの味がして冷夏を予測したとあるが、田植えの頃に秋ナスの味がなぜわかるのか

A1：春ナスと秋ナスでは獲れる種の量が違うことから、秋ナスと分かったのであろう。

Q2：小田原城主の支援を受けた尊徳は、なぜ活動拠点を栃木としたのか。

A2：小田原藩が栃木に飛び地を持っていたことによる。

Q3：尊徳は、なぜ全国600ケ所もの多くの村を指導することができたのか。

A3：すべての地に、尊徳が直接赴いたわけではない。彼の息子や弟子が指示を仰ぎ、実働した土地も多い。

【田中 克 先生コメント】

自分のことを考えると身につまされることばかりで、自らを省みる思いでお聞きしました。お話には重く大切な中身がいっぱい詰まっており、その一つは、金次郎は「気付きの達人」だったことです。現役時代に稚魚の研究をしていたとき、私がそうであれば、もっと早くもっと深く研究が進んだのではないかと悔やまれます。

池上惇先生にこの講演会で文化資本論のお話をしていただいた舞台の岩手県の遠野市や住田町、自然環境は厳しいけれど、そこで知恵を働かせ、技・業を磨いて生き抜き、幸せな暮らしを営んでいる人達がいることと、今日のお話には共通するものがあることがわかりました。

本日のご講演は、とかく個の利益を優先させがちな昨今の風潮の中で、自然と共に生きることが人間にとっていかに重要であるかということを私たちに問いかけています。最近、頭の半分以上を占め始めています有明海の現状や再生への道にも思いをはせながら拝聴しました。ありがとうございました。

以上